

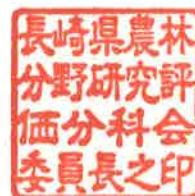
平成27年度
長崎県研究事業評価委員会
農林分野研究評価分科会
報 告 書

平成27年11月4日

長崎県研究事業評価委員会農林分野研究評価分科会は、「長崎県政策評価条例」、「政策評価に関する基本方針」にもとづき、長崎県研究事業評価委員会委員長から依頼があった研究内容について調査・審議を行なったので、次のとおり報告するとともに、意見を申し述べる。

平成27年11月4日

長崎県研究事業評価委員会
農林分野研究評価分科会
委員長 塩谷 繁



1. 評価日および場所

平成27年8月 7日（金） 農林技術開発センター

平成27年8月24日（月） 農林技術開発センター

2. 審議案件（21件）

経常研究：事前評価9件、途中評価3件、事後評価9件

3. 分科会委員

氏名	所属	役職	備考
塩谷 繁	国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 九州沖縄農業研究センター	企画管 理部長	委員長
内海修一	佐賀大学大学院農学研究科	特任 教授	副委員長
佐賀里政則	真樹販売株式会社	取締役 営業部 長	
堀田由人	全国農業協同組合連合会 長崎県本部	園芸部 長	
山口成美	有限会社 シュシュ	代表取 締役	
吉元博昭	一般社団法人 長崎県畜産協会	事務局 長	

4. 総合評価

総合評価段階は下表のとおりであった。

評価対象		総合評価※				課題数
種類	時点	S	A	B	C	
経常研究	事前	3	6			9
	途中	1	2			3
	事後	4	5			9

- 事前9課題及び途中3課題は、プレゼンテーションによる審議を行った。
- 事後9課題は、分科会前に各分科会委員に意見を聴取し、事前・途中に同じ分野の課題がない4課題について、プレゼンテーションによる審議を行った。
- 残りの5課題（p95参照）については、分科会時に質問を受ける時間を設け書面審査した。

※総合評価の段階

（事前評価）

- S＝積極的に推進すべきである
- A＝概ね妥当である
- B＝計画の再検討が必要である
- C＝不相当であり採択すべきでない

（途中評価）

- S＝計画以上の成果あげており、継続すべきである
- A＝計画どおり進捗しており、継続することは妥当である
- B＝研究費の減額も含め、研究計画等の大幅な見直しが必要である
- C＝研究を中止すべきである

（事後評価）

- S＝計画以上の成果をあげた
- A＝概ね計画を達成した
- B＝一部に成果があった
- C＝成果が認められなかった

研究テーマ別評価一覧表

種類	時期	テーマ名	総合評価	
			機関長 自己評 価	分科会 評価
経常研究	事前	イノシシ等捕獲個体の完全活用体系の確立	A	A
経常研究	事前	「おてんとそだち」、「西南 136 号」の栽培技術確立	S	S
経常研究	事前	単収日本一を目指したイチゴ「ゆめのか」の増収技術開発	S	S
経常研究	事前	トルコギキョウの 1～2 月出荷作型および二度切り出荷作型における早期出荷・安定生産技術の確立	A	S
経常研究	事前	つくりやすく売れる長崎ビワの選抜・育成と DNA マーカーを利用した効率的ビワ育種技術の開発	A	A
経常研究	事前	採卵成績を高度安定化させる技術の開発	S	A
経常研究	事前	乳牛の周産期病発生予防に向けた飼養管理技術の開発	A	A
経常研究	事前	長崎和牛ブランド強化のためのさらなる高品質肥育技術の開発	A	A
経常研究	事前	地域未利用資源活用による特殊卵生産技術の開発	A	A
経常研究	途中	「さんじゅう丸」の品種特性を活かす栽培技術の開発	S	S
経常研究	途中	長崎県産ヒノキ板材の圧密加工技術の開発	A	A
経常研究	途中	ビワ「麗月」の無核果実生産技術の開発	S	A
経常研究	事後	温暖化に対応した早期水稻「つや姫」の栽培技術の開発	A	A
経常研究	事後	硬質小麦新品種の高品質安定生産技術の確立	A	A
経常研究	事後	規模拡大を目指した露地アスパラガスの生産技術確立	A	A
経常研究	事後	アスパラガス有望品種の栽培技術確立	S	S

經常研究	事後	バレイショのウイルス病およびシストセンチュウ抵抗性品種・系統の育成	S	S
經常研究	事後	大規模露地野菜圃場における総合的環境保全型病害虫管理技術の開発	A	A
經常研究	事後	コーンコブ主体廃菌床の飼料化と給与技術の開発	A	A
經常研究	事後	省力的な矮性ネピアグラス草地造成技術の確立	S	S
經常研究	事後	給与飼料による肥育豚の暑熱ストレス低減技術の開発	S	S

5. 研究テーマ別コメント

(1) 経常研究（事前）

○「イノシシ等捕獲個体の完全活用体系の確立」

概要 要：主に埋焼却されているイノシシ等捕獲個体に蒸製骨粉化など化製処理を施し、農業における肥料や土壌改良剤、養殖漁業における飼料などの原料として利用する地域循環型の技術体系を確立する。

必要性：社会的に関心が高い鳥獣害の資源循環に係る課題であり、半島、離島、中山間地域が多く、イノシシ被害が深刻な長崎県において研究開発に取り組む必要性は高い。ただし獣害軽減の打開策とはなっていないので、この成果が、捕獲に対して捕獲料を支払うなどの行政施策に反映され、捕獲のモチベーションを高め、捕獲量を増大させるところまで描けると良い。

効率性：蒸製骨粉化や堆肥化には、既に多くの知見があり、効率的な技術開発が期待できる。

有効性：研究の成果の波及対象が、長崎県全土と広いため有効性は高い。但し、実用化に向けて、利用技術の確立から捕獲、運搬・加工までの一連の推進体制を検討することが必要である。

総合評価：半島、離島、中山間地域が多く、イノシシ被害が深刻な長崎県において研究開発に取り組む必要性は高い。但し、最終的なイノシシの捕獲、運搬、加工方法等の出口を見据える必要がある。

○「おてんとそだち」、「西南136号」の栽培技術確立」

概要：「おてんとそだち」などの高温に強く、良食味で多収をねらえる新品種・有望系統を営農体系へ導入するために必要な適作型推定技術、施肥技術、および生育診断技術を開発する。

必要性：水田の高度利用、良食味生産に向けた重要なテーマである。また、品種の導入により、作業の分散や単収向上による所得向上が期待されるため、必要性は高い。

効率性：これまでの研究成果である既存品種の適期作型を予測するシステムを研究に活かすため、効率性は高い。現地への品種の導入に向けて、既に普及組織と連携した活動を行っている点も評価できる。

有効性：当該品種の栽培技術確立により、収量や品質の向上による所得向上や、水稻の早進化による麦類の適期播種が期待されると考えられる。また、早く産地形成ができれば、ネームバリューが高まり、ブランド化する可能性もあると考えられる。

総合評価：水稻栽培の作型分散を推進する上で重要な課題と考えられる。また「おてんとそだち」「西海136号」は、「ヒノヒカリ」に替わる品種として有望であり、今後の温暖化傾向と合わせると重要な技術と言える。早期の技術開発・普及に期待する。

○「単収日本一を目指したイチゴ「ゆめのか」の増収技術開発」

概 要：本県戦略品目のイチゴは「さちのか」から多収性の「ゆめのか」へと転換を図っており、花芽分化の早進化、出荷平準化、収穫延長による品種特性を活かした増収技術を開発し、単収日本一の産地を目指す。

必 要 性：長崎県で推進している「ゆめのか」のブランド力向上のためには、需要期における生産量を確保することが重要である。また、農家の大幅な農業所得向上のためにも、増収技術開発が期待される。

効 率 性：長崎県において既に開発された暗黒低温処理、夜冷短日処理などの技術を活用するため、効率的な技術開発が行えると考えられる。また技術開発のために取り組む研究内容が、明確にまとめられている。

有 効 性：高収量の品種であるため、農家の所得向上につながる。また、JA、振興局、生産部会が整備されているため、迅速に県内農家への技術の普及が見込める。

総合評価：長崎県のイチゴ振興において、「ゆめのか」は重要な推進品目であり、増収技術による農業所得向上は重要な課題である。技術の普及により、一大産地となることを期待する。

○「トルコギキョウの1～2月出荷作型および二度切り出荷作型における早期出荷・安定生産技術の確立」

概要：1～2月出荷作型、二度切り5月出荷作型における「長崎型低コスト温度管理技術」を応用した新たな温度管理技術開発と安定生産に向けた技術を確立する。

必要性：トルコギキョウは長崎県の重要品目であり、近年その需要が伸びている。早期出荷、安定生産技術が確立されれば所得向上につながるものと考えられるため、本研究の必要性は高いと考えられる。

効率性：既に関花促進と燃油コスト削減に係る技術が確立されており、それを本研究に応用するため、効率性は高く、目標を達成する可能性も高いと考えられる。

有効性：研究成果を基に、技術管理マニュアルを作成し、県内の部会を対象に情報提供するなど、効果的な普及を図ることから有効性は高い。また、今後海外からの輸入量が減少し、国産需要が増加すると考えられるなか、県内の供給量を増大し、産地を育成する上でも有効性は高いと考えられる。

総合評価：本研究は、市場において国内供給量が少なく、輸入品が占有する時期におけるトルコギキョウの早期出荷・安定生産を可能とする技術開発を目的としており、国内需要を見据えるというトレンドに合致したものと評価されるため、機関長評価を超えるS評価（積極的に推進すべきである）とした。さらに、最終的に技術管理マニュアルを作成し、産地部会を対象に普及活用を行う予定であるため、産地への波及効果が大きく期待できる。

○「つくりやすくて売れる長崎ビワの選抜・育成とDNAマーカーを利用した効率的ビワ育種技術の開発」

概要 要：早熟性など『売れる長崎ビワ』系統の育成を目指す。また、『つくりやすい長崎ビワ』系統の育成を目的に病害虫抵抗性・自家和合性個体獲得のための交雑を行うと共に、DNAマーカーを利用した効率的な選抜技術を開発する。

必要性：長崎県の主要果樹品目であり全国的にブランド認知度が高い「長崎ビワ」の冠を維持するために必要である。生産者の高齢化が進む中、病気に強く、自家和合性を有する等生産者ニーズに対応した品種開発の期待は大きい。

効率性：長崎県はこれまでびわの育種に取り組んでおり、研究の蓄積があることから新品種育成の可能性が高く効率的な研究であると考えられる。品種開発は長い年月がかかるが、ビワの産地維持、担い手の高齢化のためにも、早期の品種開発が望まれる。

有効性：市場、生産者ニーズに対応した品種の育成は、農家所得の向上につながる。一方、品種を導入・生産するためには別途施設が必要となるため、かなりの投資が必要になると考えられる。

総合評価：本研究は、長崎びわの産地を維持するための、高齢化対策、担い手対策に対応した研究である。今後も労力分散等生産者サイドにたった育種目標の検討等を行っていく必要があると考えられる。

○「採卵成績を高度安定化させる技術の開発」

概要 要：採卵成績を高度安定化させる技術の開発を行い、長崎県独自の簡易な採卵プログラム（H27年度確立予定）と併せて、良質な受精卵を豊富に確保できる両輪の技術とし、農家の所得向上と牛群改良促進に資する。

必要性：畜産農家の経営において受胎率の向上には、受精卵移植は有用な技術であり、本研究は長崎県の独自開発技術の活用促進に係るものであるため必要性は高いと考えられる。一方、一般の畜産農家においては、人工授精が主体となっているため、受精卵移植に取り組む農家の底上げも必要である。

効率性：関連する既知のデータ等があり、効率的な研究が展開できる。また、普及推進にあたり県内の既存採卵組織に対する技術指導が必要になるが、組織との連携も期待される。

有効性：成果の波及対象が一部の畜産農家に限られるため、技術の普及方法、普及体制を明確にする必要がある。また、受精卵の移植成績の向上や検診体制など、現状の基本的部分の改善も進める必要がある。

総合評価：受精卵移植は、人工授精で受胎しにくい夏季にも使える技術であり、将来的な可能性は極めて高く、この点では機関長自己評価と同じ「S」評価が妥当といえる。しかし、本技術の利用者となる受精卵移植の利用農家が少ない現状があることから、委員会評価は「A」とした。計画以上の成果が出ることを期待する。

○「乳牛の周産期病発生予防に向けた飼養管理技術の開発」

概要：乳牛の周産期病発生予防に向けた飼養管理技術の確立を目的に、乾乳期間短縮時における適正な栄養水準の検討、効果的な強肝剤（バイパスアミノ酸）投与方法の検討を行う。

必要性：研究成果が乳牛の償却費減少による農業所得向上につながる課題であり、必要性は高い。一方乳牛の周産期病については、乾乳期間の短縮だけで疾病低減は難しく、総合的な対策が必要であると考えられる。

効率性：乾乳期間の短縮や代謝プロファイルテストについては、既知のデータもあり、効率的な研究展開が期待できる。また、周産期病の血液性状への影響を明らかにすることでさらに効率性は高くなると考えられる。

有効性：乳牛の供用期間の延長、償却費の低減等経済効果が高いと考えられる。また乾乳期間の短縮については、分娩後の乳量低下を懸念する農家も多いと考えられるので、後代の成績や繁殖性も含めて十分な実証の積み重ねが必要。

総合評価：乳牛の周産期病は、酪農家の永遠の課題であり、本研究の成果により農業所得向上が期待される。一方乳牛の周産期病については、乾乳期間の短縮だけで疾病低減は難しく、本研究の取組がきっかけとなり総合的な対策技術に結びつくことを期待する。

○「長崎和牛ブランド強化のためのさらなる高品質肥育技術の開発」

概要：生産現場で利用可能なリアルタイムかつ簡易な血中ビタミンA濃度測定装置の開発および肝機能に着目したビタミンA制御に頼り過ぎない新たな高品質牛肉生産技術の開発を行う。

必要性：研究成果が高品質な牛肉生産につながり、農業所得向上に寄与すると考えられる。また平成24年に全国和牛能力共進会で、内閣総理大臣賞を受賞し、長崎和牛のブランド強化が急がれる中、タイムリーな課題と言える。

効率性：以前から脂肪交雑診断装置の開発を連携して行ってきた産総研との共同研究であり、機器開発の可能性が高いと考えられる。

有効性：研究成果を農協、普及組織、獣医師など関係機関と連携して農家へ普及、指導する体制が整備されているため、効果的に普及を図ることができると考えられる。一方開発した機械の導入コスト、採血の方法などが課題としてあげられる。

総合評価：生産現場で利用可能なビタミンA濃度の分析装置の開発と新たな肥育牛管理マニュアルの作成は、「長崎和牛」ブランド強化に寄与する。一方脂肪交雑主眼の肉質改良は限界に近いと思われ、むしろ健康志向に合致した肉の生産や評価方法なども視野に入れておく必要がある。

○「地域未利用資源活用による特殊卵生産技術の開発」

概要：地域未利用資源が有する機能性成分を鶏卵中に移行させた特殊卵の生産技術を開発するとともに、鶏の生体内における機能性を明らかにすることで、暑熱期などのストレス環境下での安定した生産技術を開発する。

必要性：ストレス環境下での安定した生産技術を開発する取り組みは、養鶏農家の収益性改善につながると考えられる。しかし、特殊卵の生産技術においては付加価値を高めるために機能性成分を高めても、表示できるようになるまでには、距離感がある。まずは、未利用飼料資源を活用して生産性を下げずに、コスト低減を図ることを検討するとよい。

効率性：養豚で飼料による暑熱対策の先行試験があり、効率的な技術開発が可能であると考えられる。

有効性：特殊卵としてブランド確立が期待できるが、いかにPRするかが課題である。最終的な本技術の使い手は飼料メーカーと考えられるので、飼料メーカーの意見も聞きながら進めるとよい。

総合評価：未利用資源の有効活用という点では評価できるが、その後の特殊卵等出口のイメージが十分につかみきれない。しかし、飼料米を取り入れる等で大きくコスト低減、新たな付加価値を生む可能性もあり、目標以上の成果を得る可能性も十分あると考えられる。

○「さんじゅう丸」の品種特性を活かす栽培技術の開発」

概要：バレイショ新品種「さんじゅう丸」の品種特性であるそうか病抵抗性を活かす技術および種いも腐敗を防止する技術を開発し、生産現場の安定生産に資する。

必要性：長崎県の主要農産物であるバレイショ生産において、被害の大きなそうか病、シストセンチュウの対策は極めて重要である。本品種は、今後長崎県において普及拡大を図っており、その特性を活かす技術は単収向上等農業所得向上につながると考えられる。

効率性：研究については土壌管理に有効なカルシウム資材の開発等順調に進捗していると考えられる。また、カルシウムと腐敗の相関について把握する必要がある。

有効性：そうか病に強い「さんじゅう丸」の特性を生かした土壌pHと腐敗の原因を解明することは有効である。また平成25年度で106haに普及していることから、当初目標の200haを超える可能性が十分に見込める。

総合評価：順調に進捗していると思われるので、研究が進んだ部分は、どんどん前倒して、普及に向けた取り組みを進めていただくことを期待する。そうか病に強い有望な品種であるため、積極的な推進を望む。

○「長崎県産ヒノキ板材の圧密加工技術の開発」

概 要：ヒノキ板材の表面硬度や強度を上げるための、圧密加工に適した温度、時間等の処理条件を明らかにする。併せて、圧密材で製作した試作品の適性評価を行い、圧密加工のマニュアルを作成する。

必 要 性：ヒノキ板材の実需者ニーズが研究内容に反映され、ヒノキ板材の新たな用途拡大に向けた研究課題であるため、必要性は高い。

効 率 性：ヒノキの表面硬度について、「学校机」並みと目標を明確に定め、結果的に現在目標を達成しているため、効率性は高い。今後は、実用化に向けて、木材業者との加工に係る連携を図るとともに、木材の利用目的、利用用途を整理することが必要である。

有 効 性：木材加工にあたり、既存の設備機械を利用できることから、長崎県の産業構造にあった技術として普及の可能性が高い。

総合評価：長崎県の独自技術として、県内の産業発展に役立つと考えられる。但し、今後は、木材の利用目的、利用用途の検討や木材加工業者との連携など出口を研究課題の中に盛り込む必要がある。

○「ビワ「麗月」の無核果実生産技術の開発」

概 要：ビワ「麗月」は2011年に自家不和合性であることが確認された。そこで、自家不和合性の特性（種子ができない）を利用し、大果で良食味なビワの無核（種なし）果実生産技術の開発を行う。

必 要 性：無核果は時代のニーズに合っており、新たな消費者を取り込む契機となり得る研究であると考えられる。話題性は十分に高いが、収益性の検討も必要である。

効 率 性：裂果対策などの課題はあるが、普及に向けた植物成長剤についてメーカーと連携して取組を実施する等概ね計画通りに進捗している。

有 効 性：ジベレリン処理など作業に手間がかかるため、高齢化の中でどれだけの農家が取り組むか、などの解決すべき課題はあるが、研究成果が新しいマーケットの開拓につながると考えられる。

総合評価：新たなユーザー獲得の可能性のある技術であり、その点では機関長自己評価と同じ「S」が相応しい。しかし、新しい商品でブランド力をつけるには、ある程度の出荷量確保が必要であり、高齢化が進む中で、どれだけの生産者が取り組んでくれるか不安定要素もあるため、委員会評価を「A」とした。新たな技術であるので、大きな成果となることを、強く期待する。

○「硬質小麦新品種の高品質安定生産技術の確立」

概要：本県の特産品「長崎ちゃんぽん」原料用として育成中である硬質小麦新品種（H24品種登録予定）について、収量向上、子実タンパク質制御のため施肥技術を中心に検討する。併せて、県内各麦産地の土壌分析を実施し、産地別子実タンパク質制御技術を確立する。

必要性：「長崎ちゃんぽん」原料用として育種開発された「長崎W2号」の安定供給に向けて、高品質・安定生産技術の早急な確立が求められるなか、極めて重要な課題である。

効率性：これまでの知見を活用することで、栽培における適正な施肥量の特定や子実たんぱく質制御技術の確定など効率的な技術開発が進展し、ほぼ計画通り進捗していた。また、実用化に必要な実地試験についてもすでに着手している。

有効性：試験結果が明確であるため、栽培技術を効率的に普及できる。また、本品種を利用したちゃんぽんの試作、需要拡大等のPRを行うために、関係団体で協議会を設立しており今後の取組に期待できる。一方、小麦を利用したちゃんぽん麺開発に係る小麦粉のブレンド割合や土地条件によるたんぱく質含有量の違いなどについては検討する必要がある。

総合評価：製麺業者、製粉業者、農業団体等で構成する協議会を既に設立し、本品種を使用したちゃんぽんの試作、需要拡大に向けたPR等を実施していることから今後のブランドの確立、強化が期待できる。

○「アスパラガス有望品種の栽培技術確立」

概 要：半促成長期どり栽培においてアスパラガス品種「UC157」（以下ウェルカム）に替わる高収量品種の安定生産のために立茎技術等の栽培技術ならびに発生が顕在化している茎枯病や褐斑病の防除技術確立を図る。

必 要 性：アスパラガスは、長崎県の主要品目であるため、高収量で病害に強いアスパラガス品種の選定と栽培技術の確立は長崎県の農業振興に極めて重要である。また、地域からの要望課題である病害虫防除を解決する課題であるため必要性は高い。

効 率 性：収量性の高い品種「スーパーウェルカム」を選定し、その栽培技術、病害虫防除技術を提示しており、ほぼ目標を達成したと考えられる。

有 効 性：優れた成果が得られただけでなく、病害虫防除のマニュアル作成や各地域における研修会の実施などすでに現地に浸透している。普及の際、改植による所得の試算について検討する必要がある。

総合評価：長崎県に適した有望品種の選定、栽培技術確立、普及体制の構築と計画以上の成果をあげたと考えられる。

○「大規模露地野菜圃場における総合的環境保全型病害虫管理技術の開発」

概要 要： 実用技術開発事業「諫早湾干拓地における環境保全型大規模生産技術体系の構築」で得られた成果を基に、新たな環境負荷低減技術を組み合わせ、大規模露地野菜圃場における総合的環境保全型病害虫管理技術を開発する。

必要性： 病害虫の多い西南暖地において、環境保全型病害虫管理技術は、今後望まれるものであり、その先駆的な試験には非常に強い期待がある。また、諫早湾干拓営農地という大規模圃場のスケールメリットを活かすための病害虫防除管理技術の確立を目指すことは、必要性が高いと考えられる。

効率性： 日本における研究事例が少ない中で、天敵温存利用植物の利用技術や性フェロモンと黄色灯を組み合わせた防除技術の確立を行うなど、計画どおりに進捗した。

有効性： 今後の技術開発に繋がる有用な知見を得ており、農業者を対象にした研修会の開催など普及に向けた取組もすでに着手しており期待できる。但し今後変遷していく諫早湾干拓地の営農類型に則ったマニュアルを構築する必要がある。

総合評価： 環境保全型農業、特別栽培農業を実践する上で、適期農薬処理は必須であり、この時期が明確になるのは良いことである。今後の技術開発につながる有用な知見を得ており、普及に向けた体制づくりも進められており、今後が大いに期待される。

○「省力的な矮性ネピアグラス草地造成技術の確立」

概 要：省力的な農地管理が可能だが、苗移植に労力がかかる矮性ネピアグラスについて、目的や条件に応じた機械作付体系（野菜用移植機の応用、サトウキビ方式、播き苗方式等）によって省力的に造成できる技術を確立する。

必 要 性：飼料高騰が続く中で、高収量、高栄養で多年に利用できる自給飼料生産は、極めて重要な課題である。また、本草地造成技術は労力低減に寄与するため、必要性は高いと考えられる。

効 率 性：草地造成マニュアル作成に加えて、既に長崎県内の数カ所において実証済みであるため、計画以上に進捗したと考えられる。

有 効 性：マニュアルや普及体制が整備され、計画通りの成果が得られた。但し造成初年度の草量確保の方策について、今後検討する必要がある。

総合評価：本技術では、造成方法が最も多労であったが、地域にある野菜用等の移植機で省力化が図られ、高齢農家でも造成が可能になり、計画以上の発展性を得た。飼料高にあえぐ農家に一刻も早く普及されることを期待する。

6. 分科会総評

- 評価した研究は、生産現場で問題となっている課題や将来を見据えた課題を多角的に取り上げており、ニーズを捉えた研究として計画、実施されていた。また、研究成果による経済効果についても、「生産量」「品質」「生産コスト」等の観点から明確に説明できていた。
- 研究成果の普及方法について一部課題は、通常の研究と平行して、地域における実証試験の実施や技術マニュアルの作成、生産現場の意見交換を行うなど、効率的に普及するための取組がなされていた。
- これまで培ってきたDNAマーカー等の育種技術が効率的な品種育成に活かされており、研究が有機的に連動していると思われた。バイオテクノロジーを活用した複合抵抗性育種素材の育成も今後の長崎県の強みにつながる研究成果として期待できる。

(参考) 農林分野研究評価分科会評価一覧表
委員審議課題

種類	時期	課 題 名	視 点	評 価
経常研究	事前	イノシシ等捕獲個体の完全活用体系の確立	必要性	S
			効率性	A
			有効性	A
			総合評価	A
経常研究	事前	「おてんとそだち」、「西南 136 号」の栽培技術確立	必要性	S
			効率性	S
			有効性	A
			総合評価	S
経常研究	事前	単収日本一を目指したイチゴ「ゆめのか」の増収技術開発	必要性	S
			効率性	A
			有効性	S
			総合評価	S
経常研究	事前	トルコギキョウの1~2月出荷作型および二度切り出荷作型における早期出荷・安定生産技術の確立	必要性	S
			効率性	S
			有効性	A
			総合評価	S
経常研究	事前	つくりやすくて売れる長崎ビワの選抜・育成と DNA マーカーを利用した効率的ビワ育種技術の開発	必要性	A
			効率性	A
			有効性	A
			総合評価	A
経常研究	事前	採卵成績を高度安定化させる技術の開発	必要性	A
			効率性	A
			有効性	A
			総合評価	A
経常研究	事前	乳牛の周産期病発生予防に向けた飼養管理技術の開発	必要性	S
			効率性	A
			有効性	A
			総合評価	A
経常研究	事前	長崎和牛ブランド強化のためのさらなる高品質肥育技術の開発	必要性	S
			効率性	A
			有効性	A
			総合評価	A
経常研究	事前	地域未利用資源活用による特殊卵生産技術の開発	必要性	A
			効率性	A
			有効性	A
			総合評価	A

經常研究	途中	「さんじゅう丸」の品種特性を活かす栽培技術の開発	必要性	S
			効率性	S
			有効性	A
			総合評価	S
經常研究	途中	長崎県産ヒノキ板材の圧密加工技術の開発	必要性	S
			効率性	A
			有効性	A
			総合評価	A
經常研究	途中	ビワ「麗月」の無核果実生産技術の開発	必要性	S
			効率性	A
			有効性	A
			総合評価	A
經常研究	事後	硬質小麦新品種の高品質安定生産技術の確立	必要性	S
			効率性	A
			有効性	A
			総合評価	A
經常研究	事後	アスパラガス有望品種の栽培技術確立	必要性	S
			効率性	A
			有効性	S
			総合評価	S
經常研究	事後	大規模露地野菜圃場における総合的環境保全型病害虫管理技術の開発	必要性	S
			効率性	A
			有効性	A
			総合評価	A
經常研究	事後	省力的な矮性ネピアグラス草地造成技術の確立	必要性	S
			効率性	S
			有効性	S
			総合評価	S

書 面 審 議 課 題

種類	時期	課 題 名	視 点	評 価
經常研究	事後	温暖化に対応した早期水稻「つや姫」の栽培技術の開発	必 要 性	S
			効 率 性	A
			有 効 性	A
			総合評価	A
經常研究	事後	規模拡大を目指した露地アスパラガスの生産技術確立	必 要 性	A
			効 率 性	A
			有 効 性	A
			総合評価	A
經常研究	事後	バレイショのウイルス病およびシストセンチュウ抵抗性品種・系統の育成	必 要 性	S
			効 率 性	S
			有 効 性	S
			総合評価	S
經常研究	事後	コーンコブ主体廃菌床の飼料化と給与技術の開発	必 要 性	A
			効 率 性	A
			有 効 性	A
			総合評価	A
經常研究	事後	給与飼料による肥育豚の暑熱ストレス低減技術の開発	必 要 性	S
			効 率 性	A
			有 効 性	S
			総合評価	S

